

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

氏 名 石山 俊

論 文 題 目

サーヘル内陸国チャドの環境人類学
— 貧困・紛争・「砂漠化」の構造 —

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	嶋田 義仁
委員	名古屋大学	教授	宮原 勇
委員	名古屋大学	准教授	佐々木 重洋
委員	名古屋大学	准教授	東 賢太郎
委員	秋田大学	教授	縄田 浩志
委員	名古屋学院大学	教授	今村 薫

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

(論文の概要) 本論文は、アフリカ大陸のほぼ中央に位置するサーヘル内陸国家チャドの貧困・紛争・「砂漠化」の構造を環境人類学の視点から解明を試みた。環境とは論者にとって自然環境であるとともに、生活する人々の内外の歴史とそれによって築かれた文化でもある。論者の研究の出発点は、1993年より4年間参加したチャドでの環境NGOの砂漠化防止活動である。その過程で、論者は、植林活動を中心とした砂漠化防止対策の矛盾と限界を経験した。チャド住民は「貧困・紛争」に苦しむ住民であった。それゆえ貧困・紛争・「砂漠化」は一体として理解する必要があるという認識にいたった。その理解の鍵となったのがチャドの内陸性(enclavement)である。なぜならそれは、チャド盆地に位置するという自然地理学的な内陸性であるとともに、列強の恣意的なアフリカ分割という植民地化がうみだした近代の歴史政治学の産物でもあったからだ。著者は、その内陸性に注目しながら、チャドの貧困・紛争・「砂漠化」の構造の解明を試みた。

本論文は3部に分かれる。第1部では、まず、内陸国チャドの地理・生業・文化の多様性の南北構造があきらかにされる。乾燥地北部には、牧畜文化とイスラーム文化が卓越し、湿潤南部には農業文化とキリスト教が卓越する。他方でチャドには、巨大な内陸湖チャド湖とそこに南部から流入するシャリ川ロゴンヌ川流域に発達し氾濫原文化も存在する。そこには漁業、牧畜、灌漑や氾濫原利用による稲作、モロコシ(ベレベレ)栽培など、豊かな第一次生産がおこなわれ、チャド最大の人口稠密地帯となっている。チャドの首都ジャメナもロゴンヌ川河畔に位置する。

第II部では、一転、内陸国チャドの形成と近代政治経済史が論じられ、論者は植民地化以前サーヘル地帯には9-10世紀にはじまったサハラ交易によりイスラーム文明が形成されていたことをあきらかにする。その代表は、チャド湖周辺に成立したカネム・ボルヌ帝国とその衛星国家コトコ、バギルミ、及び、東部に成立したザガワ、ワッダイ王国である。しかしフランスによる植民地化はチャドの内陸化をもたらした。なぜなら、チャドはギニア湾岸から遠く離れた内陸盆地に位置したうえに、周囲をイギリス、ドイツ、イタリア植民地に囲まれていたからである。その結果、サハラ交易は衰退し、植民地政策は、南部の非ムスリム農耕民中心におこなわれ、そのキリスト教化もすすめられた。独立以後のチャドも、内陸化に由来する貧困に苦しみつつ、19年間にわたってキリスト教化した南部住民中心の政治体制下にあった。北部住民の反乱がくりかえされた結果、三代目大統領より現在までの35年間は、北部出身の5人ムスリム大統領によって統治されるに至った。しかし、北部住民間にも対立があり、政権交代がくりかえされ、それを支援する国外勢力も存在した。

第III部では、内陸国チャドの「砂漠化」と住民生活が論じられた。まず、サハラ・サーヘルの2万年スケールの気候変動と、「砂漠化」問題の歴史、砂漠化対策の変遷、があきらかにされる。次に、環境NGOがかかわった2村の事例に即して、住民生活の視点から「砂漠化」問題とその対策が検証され、あらためて砂漠化防止策に欠けていた住民生活への配慮が明らかにされる。環境NGOもこれに対応しようとしたが、その理念による活動制約と組織・人員能力の不足によって失敗におわる。しかし、他方で論者が研究者としてかかわった村では、19世紀末の乾燥化による住民移動と旧氾濫原における新村建設などの「砂漠化」への住民独自の対応策や、改良カマドの非効率性などがあきらかにされた。

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

(評価) 本論は、サーヘル内陸国チャドがかかえる貧困・紛争・「砂漠化」の問題を、「一体としてその全体構造を理解することなしに、チャドがかかえる貧困・紛争・「砂漠化」問題の理解も解決も不可能」なことを検証した論文である。大枠に於いて、新規性があり説得的な論点となっている。

構成においては、第 I 部で扱う地理・生業・文化の分析によりサーヘル内陸チャドの自然環境の特性とともに、その上に成り立つ実に多様な住民生活とその文化をかなり構造的に把握した。これにより、サーヘル国といえども、その自然環境と住民文化は実に多様であり、その貧困や「砂漠化」を論ずるにあたって単純な一律的理解は危険であることを明らかにした。

II 部で扱う近代政治経済史の解明により、「紛争」の背景となる、植民地化以前に存在したイスラーム文明のフランス植民地政策の「内陸化」による抑圧と北部南部の権力闘争、さらにはその共通背景となる貧困の構造があきらかにされた。そして第 III 部では、「砂漠化」と住民生活を明らかにすることにより、「砂漠化認識の問題点」を論じる構成は明瞭で優れている。

内外の研究動向を追うに、チャド現地における調査は困難を伴い、チャドの研究環境は非常に厳しい。そのような中、足掛け数十年を費やして、オリジナルな現地調査とりわけ開発援助と学術調査の両方の観点から現地調査を行った資料に基づき、分析を加えている点は、本論の最も優れた特徴となっている。チャドの「内陸化」が近代チャドの発展を妨げる要因となっていることを指摘した学術的価値は高い。また、環境 NGO が推進した改良カマドの課題と問題点を、世帯ごとの利用実態を明らかにする学術的な視点により分析し、援助者の論理と住民の論理の齟齬をあぶり出した内容は、環境人類学的視点から NGO 活動を記述・分析する画期的な論考となっている。

本論文はまた、国家誌としての価値も有している。国家誌は小川了氏がセネガルを例に試論を提出しているが、アフリカに数ある国家の夫々を総合的に論じ、各国家の固有の問題点をあきらかにする研究はすくない。マクロな視野を有する政治経済学研究でのアフリカ国家の研究はあるがそれは一般論におちいりやすく、各国の固有な自然・歴史・文化環境に即した研究はすくない。他方、人類学研究には部族や村落レベルにおいては詳細なモノグラフィーが蓄積されているが、国家レベルにおける人類学的な研究はすくない。論者が提出した本論文は、そのようなチャド国家誌、あるいは国家人類学の試みとして独創的である。本論文によってチャドという国の全体像がはじめてあきらかになった。そして、貧困、紛争、「砂漠化」の解決は、当該国の全体像を根本からあきらかにする研究なくして不可能だということを示している点でも、本研究の価値はおおきい。すくなくとも、チャドとあい似た状況にある、マリ、ニジェールなどのサーヘル諸国研究において参考とすべき研究モデルとなっていることは確かである。

ただし、本論文には多くの疑問も指摘された。事例研究としては優れているが、「貧困」「紛争」などの基本概念についてより立ち入った理論展開が必要であること、「砂漠化」についても、批判的検討はしたが、その再定義や具体的な解決策がかけているなどである。文献にも脱落が指摘された。しかし本論文は、以上の理由とともに、サーヘル内陸国チャドの 貧困・紛争・「砂漠化」の構造 を、綿密な資料分析をふまえて明確に分析し整理した研究として、博士(文学)として一同合格とした。